枯葉が燃えるのを見た時に思った

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

枯葉が燃えるのを見た時に思った

【Nコード】

N4167L

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

電車に乗っていた時の光景を思い浮かべて暇だったから書きました。落書きですみません。

ちりちりと、焼死していく枯葉。憤怨さえも無い。為されるがままに青空に混ざり込んでいく茶の亡骸が、火花となつて最後を綺麗に弾け飛ぶ。人が、消えるときより、遙かに、潔く、簡潔に、燃え尽きていく。さようなら、の挨拶と共に見送りましょう。拍手と、感涙をもつて、して。消えてしまえば、もはや何者であつたか等忘れられてしまつたろう。どうせ、墓など建てられやしないのだから。葉の生き様を人は知らない。だから葉も人の生き様を知らぬが、消えてしまえば、葉も人も無い。全て、大気の塵芥。吸い込まれていく、きつと、どこか気持ちの良いところにも行つたのだから。生きていたものなら羨ましい限りかもしれないが、羨むことが出来るのも生きていた時間の限りだろうから、困つたことだ。

枯葉よ風に荒び、荒れた日々を喪失していくのだろうか。忘却されるのは彼らの記憶か、それとも彼らの願いか。失つていくのは心か、はたまた身体が先か、あるいは同時のことなのか。いずれわかれることだから首を突つ込むべきでないのはわかるが、閑散と生活している錆びれの人間というのはそういう性質が止まない様子だ。これこそが人間たる証拠なのだろう。きつとそれは、良いことだ。少なくとも、悪いことでは無い。

さあ、片手を挙げて、友人に挨拶をしよう。大きなものに身を預け歩行を余儀なくされているのは、皆同じだ。私たち一人一人が生きて、死んで、それが一つの巨大として息吹を繰り返しているのだ。心臓の鼓動は、何時だって、これからも、一つだけだ。

そういうことを言いながら死んだら、さぞ気持ち悪いだろうなと想像するよつな、毎日。でも文章を書くのはつまらなく無い。ありがたいことだ。

とても助かっている。

(後書き)

これまでに書いた作品の感想、暇な方いたら書いてくださるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167/>

枯葉が燃えるのを見た時に思った

2010年12月18日15時08分発行